校長室だより～燦燦～ №９９８

ものかき

2024.3.26

ようやく、なりたいものが見つかった。長かった。ここまで、何十年という月日を要した。“ものかき”になりたい。それも、売れないものかきである。ものかきとは、文章を書くこと。また、それを職業とする人である。残念ながら、職業にする自信はない。そうなるとも思えない。

本当は、作家、文筆家、エッセイストなどと言いたいところである。だが、そんなレベルではない。そこで、遠慮がちに売れないものかきとなる。何を書くのかというと、まずはエッセイである。これは、今までも続けてきた。兼好法師の如く、つれづれなるままに書き綴るのである。

もう一つ考えていることがある。実話に基づくフィクションである。何もないところから小説や物語を書くのは、自分にとっては相当ハードルが高い。向かないし、できそうにもない。だが、実話というベースがあればどうであろう。できるかもしれない。イメージは、さくらももこである。笑いあり、涙ありの特別ではない日常のストーリーである。

他にも、詩や短歌、俳句もある。やめた方がよい。やる前から結果は見えている。自分に一番合っているのは、きっとエッセイなのではないか。随筆、随想である。

年が明け、ようやく人生が動き出した。４月から福島民友新聞の「随想」を担当することになった。月に一度のペースらしい。改めて民友新聞の紙面を見てみた。火曜日、木曜日、土曜日に、「随想」が掲載されていた。こうなったのは、単なる偶然である。人との出会いのおかげである。売れないものかきを目指している自分にとっては、実にタイムリーな話だった。渡りに舟である。

今までもそうなのだが、文章を書くためには、すなわちアウトプットのためには、インプットが必要である。これからも、様々なことを吸収しなければならない。本を読まなければならない。人の話を聞かなければならない。そして、自分なりに考えなければならない。

まさか、こういった展開になるとは思わなかった。人間万事塞翁が馬である。書くことは嫌いではない。では、好きかというと疑問である。そこまでではないような気がする。誰にでもあると思うが、表現していたいという思いである。それは、絵画でも、音楽でも、ダンスでも、小説でも、陶芸でもよい。私の場合は、何もできるものがない。唯一できそうなのが、書くことである。

この「校長室だより～燦燦～」のおかげで、生きる道が見つかったように思う。Ａ４判１枚で１０００枚、原稿用紙にすると、３０００枚である。かなりのトレーニングを積んだのかもしれない。土台のようなものはできた。この営みも、読者の皆様からの反応がなければ、どうなっていたかはわからない。長い期間に渡って、同じことを続けるには、励みになるものがあった方がよい。幸い、私には、それがあった。読者の皆様に感謝したい。